

古代エジプトのキリスト教伝道者たち —コプト教の聖人をめぐって—

森 貴史 *

Christian Evangelists in Ancient Egypt: Outstanding Saints of Coptic Christianity

Takashi MORI*

[Abstract]

The Copt is an ancient Christianity in Egypt and is often reported to be opposed to the Islam in recent years. The population of Coptic Christians is currently about 10% of the total population in Egypt. While they are small in population, it is reported that Coptic Christianity has survived since the era of the “Acts of the Apostles” described in the New Testament. “Copt” comes from the Greek word “Egyptian” and throughout history “Copts” has designated “Christians in Egypt” who were persecuted by the Arabs in the 7th century.

The Copts accept the historical facts such as “the Holy Family Journey in Egypt” based on the script of the “Bible/Matthew” (the New Testament), “Mark the Evangelist,” and the “Mission and Martyrdom at Alexandria.” Western scholars, however, doubt the legend in Venice where the body of St. Mark, who was supposed to be in Alexandria, was found and laid to rest. Among the saints in Copt, Saint Anthony and Saint Paul are particularly adored. St. Anthony is called the “Father of the Monastery” and is highly evaluated by Western scholars, and the oldest monastery in Egypt owed its name to him. Another notable saint, St. Paul, is called “The Paul of Thebes” and like St. Anthony, he is known as a Christian hermit who lived in the dessert for ascetic practices. Even now Egyptians consider their hermit-type life as saint model to follow, such as when they spent time in a monastery placed in the remote desert. Unfortunately, most of the monasteries have been in ruins. However, monasticism featuring Coptic Christianity embraces cultural and religious tradition running from the ancient era, and there are conspicuous differences between Coptic monasteries and Western monasteries.

At present, Coptic Christians are the minority group in Egypt, but in the mid-4th century when Egypt was province of ancient Rome Christianity was the established religion, and christians had great power as majority group. It is worthy of note that there was a history of religious persecution; the Jews and believers of ancient gods and goddess were persecuted by the Copts. Above all, the destruction of the Alexandria Serapeum in 391 AD and the murder of a Greek female Neoplatonist named Hypatia in 415 AD have been recorded as symbolic events in the history of Egypt. However, historical events such as the intrusion of the Persians into the Roman Empire, occupation by the Persian army in 619 AD, and conquering of Egypt by the Arabs from 641 AD to 868 AD made Egypt to be a country for

* 関西大学文学部 (Faculty of Letters, Kansai University, Japan)

the Muslims, and as a result, the Copts returned to be a group of the minority. The religious issues among the groups, the Egyptian Copts and the Muslims, are as complex as political issues, but religious reconciliation is the impending matter that has to be solved.

[要旨]

最近、イスラム教徒との対立が日本でもよく報道されるコプト教は、エジプトの古代キリスト教から発する 1 派である。その信徒はエジプト総人口の 1 割ほどであるが、『新約聖書』の「使徒行伝」の時代から存続してきたとされる。「コプト」(Copt) とは、「エジプト人」という意のギリシア語に由来するが、7 世紀のアラブ人によるエジプト征服後は、エジプトのキリスト教徒を指すようになった。

かれらは『新約聖書』の「マタイによる福音書」の記述に依拠した〈聖家族のエジプト逃亡伝承〉や、聖マルコのアレクサンドリア伝道と殉教も史実として受容している。後者はとくに、アレクサンドリアにあったとされる聖マルコの聖遺体を保管しているという伝承がヴェネツィアには伝わるものの、西欧では一般に疑問視されているようだ。コプト教でとくに崇拜されている聖人は、聖アントニウスと聖パウロスである。前者はとりわけ、「修道制の父」と呼ばれる、西欧でも評価が高い聖人で、エジプト最古の修道院もかれに由来している。「テーベのパウロス」とも呼ばれる後者もまた、前者とおなじく、砂漠に隠棲し、悪魔の誘惑とたたかいつづけたことで有名である。

このふたりの聖人の隠棲生活は、エジプトでは現在もなお、人里離れた砂漠の修道院での模範とされている。いまは廃墟となっている修道院も少なからずあるが、その修道制文化は古代から継承されてきたといわれており、同時にコプト教独特の性質を特徴づけるものであって、西欧の修道院とはかなり異なっている。

現代のコプト教は、エジプトではマイノリティであるが、ローマ帝国の属州であり、キリスト教が国教化された 4 世紀中葉以後は、マジョリティとして勢力を誇った時代であった。とくにユダヤ教徒やエジプト古来の神々の信仰者たちを迫害した歴史がある。なかでも、391 年のアレクサンドリアのセラペウム破壊と、415 年の新プラトン主義女性哲学者ヒュパティア殺害は、もっとも象徴的な事件とみなされるものだ。

とはいえ、619 年のペルシアのローマ帝国侵入と占領、641 年から 868 年のアラブ人のエジプト征服によって、エジプトはイスラム教徒の国になり、それ以来、コプト教徒はマイノリティになってしまった。もちろん、エジプトのコプト教とイスラム教の対立をめぐる諸問題は、現在の政治問題とともに非常に複雑ではあるが、解決されなければならない火急の事案であることはまちがいないだろう。

1 中東のキリスト教

2011 年の 1 月以降、北アフリカおよびアラビア半島北部に位置する地中海沿岸の諸国では、チュニジアを皮切りに、革命が数珠つなぎのごとく起こった。いわゆる〈アラブの春〉である。これまで覇権をにぎってきた独裁政権、軍事政権が民衆によって打倒されていく過程を、わたしたちは各種メディアの報道で眼にしてきた。

エジプトもまた、例外ではなかったのは、周知のとおりである。しかし、この一連の革命騒動に関する報道とはべつに、エジプトをめぐる血なまぐさい記事が新聞に掲載されていた。たとえば、朝日新聞 2011 年 3 月 10 日朝刊 11 面掲載の記事の見出しは、「コプト・イスラム教徒衝突 エジプトで 11 人死亡」である。

「エジプトの首都カイロで8日、キリスト教の一派コプト教徒とイスラム教徒との間で数千人規模の衝突があり、ロイター通信などによると、少なくとも11人が死亡、110人が負傷した。／治安当局者によると、先週、カイロ郊外のコプト教教会がイスラム教徒によって、放火された事件をきっかけに8日夜、数千人のコプト教徒がカイロ市内の数カ所で、地位改善を求めるデモを行い、一部が暴徒化。[・・・]イスラム教徒との殴り合いや投石に発展し、衝突は4時間近く続いた。死者の大半がコプト教徒とみられる」¹。

この記事が伝えるイスラム教徒とコプト教徒との対立は、朝日新聞では、その後も断続的に掲載された。同年5月9日付朝刊の「コプト教の教会襲われ10人死亡」という見出し記事によると、カイロ西部で両宗派の衝突から、コプト教の教会が炎上、10人が死亡、200人近くが負傷したという²。同年10月12日付の「エジプト副首相が辞意」という記事では、コプト教徒と政府軍の衝突が20人以上のコプト教徒の死者を出した事件に対して、ベブラウィ副首相が辞任し、軍への抗議の態度を示したことが報道されている³。

これらの記事はすべて、イスラム教徒とコプト教徒との宗教対立が原因で、多くの死者が出ていることを報道するものである。そして、この対立は最近の革命騒動によって発生したのではなく、イスラム教がエジプトで布教されるようになって以来、継続してきたのであった。

ちなみに、わたしたちにとって違和感が非常に大きいのは、コプト教というキリスト教の1派である。日本人がキリスト教を考えるばあい、ローマ・カトリックまたはプロテスタントをおのずと想起するであろう。

しかし、コプト教は、そうした思考がヨーロッパ中心主義的な視点にもとづくものであって、中東の宗教史に対する無知を鋭く指摘してくれる。というのも、このキリスト教の1派は、使徒たちが布教していた時代から現代までエジプトで存続してきたのであって、中東世界がイスラム化する以前から存在していたからである⁴。たとえば、エジプトで用いられる暦は3種、西暦、イスラム暦、コプト暦であって、日常生活では西暦が使用されるが、イスラム暦、コプト暦はそれぞれの宗教に従っている⁵。それゆえ、断食節も年間7期あったり⁶、イエスの降誕祭であるクリスマスはヨーロッパでは12月25日であるが、現在でもなお、コプト教会では、1月7日をクリスマスとしており、西欧の教会暦とは異なる慣例を遵守している⁷。

とはいえ、コプト教もまた、中東キリスト教全体に包含されるものの、いくつもの宗派に分かれており、教義についても、厳密にはかなり複雑であるのが実態である。非キリスト教徒である門外漢の筆者にとっては、そうした事情や領域を容易に把握することが困難であるゆえに、本稿では言及しない。そ

1 朝日新聞、朝刊、2011年3月10日付11面。

2 同紙、朝刊、2011年5月9日付8面。

3 同紙、朝刊、2011年10月12日付11面。

4 中東教会協議会編（村山盛忠、小田原緑訳）、中東キリスト教の歴史、日本基督教団出版局、1992年、11-12、138頁参照。

5 村山盛忠、コプト社会に暮らす、岩波新書、1974年、104-105頁参照。

6 前掲書、131-132頁参照。

7 前掲書、26頁参照。

のかわり、西欧のキリスト教文化に匹敵するものとしてのコプト教文化の側面について、いくらかの考察を試みることにしたい⁸。

本稿でとりあげるのは、わたしたちにとって興味深いであろうコプト教の成立事情と、これに関係する聖人信仰である。このばあい、重要なのは、ヨーロッパのキリスト教会との差異である。くわえて、西欧のキリスト教信仰に欠かせない聖人信仰は、コプト教徒にとってはいかなるものであるのか、また、その聖人信仰を起源とするエジプトの修道制についても言及する。これによって、ヨーロッパとエジプトにおけるキリスト教信仰の差異を明白にし、コプト教の本質の片鱗に触れることになるだろう。

2 コプト教とは

現在、一般的によく用いられている「コプト」(Copt)という語は英語であるが、そもそもは、アラビア語で、語源的には「エジプト人」というギリシア語に由来する。「もともとは、イスラム教徒のアラビア人によって639年と642年に征服されたエジプト土着の住民」を指す語であったが、のちには「キリスト教徒のままでいつづけたり、反カルケドン信条派にしてキリスト単性論派の土着のエジプト人」のことを意味するようになった⁹。

ここでいう「反カルケドン信条派」とは一般的に、451年のカルケドン公会議(第4回教会総会議)で、アレクサンドリアの総主教ディオスコロスとコプト教が異端とされたために、この会議での決定を認めない立場の人びとを指し、この会議後に、コプト教会は正式にキリスト単性論(イエスは、神性と人性が結合し、人性は神性に吸収された結果、ひとつの本性しか残らないとする説)支持派となったとされている¹⁰。そして、このキリスト単性論ゆえに、コプト教会は異端とされてきたのである。

「コプト」という語から、すでに5世紀中盤のカルケドン公会議以前に、古代キリスト教がエジプトで布教されていたという事実がわかるが、じつはそれどころか、キリスト教史の最初期、使徒たちが中東や地中海沿岸の世界で布教していた時代にまで遡及することができるのであって、エジプトもまた、その例にもれないのだ。

ローマ帝国においては、313年にコンスタンティヌス1世がキリスト教を公認し、テオドシウス帝がキリスト教を国教化したのは、380年である。しかし、それ以前、アレクサンドリアは総主教がいたのだった。すなわち、教会の指導者である「総主教」という称号が用いられており、かれらの教会の管轄権が及ぶところは、「総主教管区」と呼ばれていたのだが、アレクサンドリアにくわえて、ローマ、

8 2011年8月下旬に、筆者はカイロとアレクサンドリアの古代遺跡調査に参加したが、そのさいに、現在はイスラムが一般的なエジプト社会のうちに、連綿と息づく古代キリスト教の系譜をかいまみた体験が本稿執筆の契機となったことを記しておく。

9 Vgl. Peter Grossmann: Kopten III. In: Georg Schöllgen u. a. (Hrsg.): *Reallexikon für Antike und Christentum. Sachwörterbuch zur Auseinandersetzung des Christentums mit der antiken Welt*. Stuttgart: Anton Hiersemann, 2006, Bd. XXI, S. 535-573, hier S. 536.

10 村山盛忠、1974年、84頁参照。

アンティオキア、エルサレム、コンスタンティノポリスを、「5主教座」と呼んでいたのである¹¹。

現在、中東のキリスト教会は5グループに分けることができる。オリエンタル・オーソドックス教会、カトリック系諸教会、ビザンティン典礼オーソドックス教会、東方アッシリア教会の4グループと、聖公会、ルター派、プロテスタント諸教派の3つあわせてひとつのグループである。最初の教派オリエンタル・オーソドックス教会は450万人の信徒を有する最大勢力であるが、これには、いわゆるエジプトのコプト教会も含まれている¹²。

キリスト教徒が全国民総人口の1%未満であるわれわれにとっては、近代以降にヨーロッパの宣教師たちが布教したものが、エジプトに普及したと考えがちであろうが、すでに『新約聖書』の「使徒行伝」に記載されている時代から、エジプトにはキリスト教徒が存在しており、さらに、かれらはヨーロッパのローマ・カトリック教会やプロテスタント教会とは別種にして、より原初的な古代キリスト教を信仰していたのだった。

つまるところ、紀元後2世紀から3世紀のあいだに、エジプトはキリスト教化されて、アレクサンドリアはキリスト教神学の中心地となって以来、7世紀のアラブ民族侵入までは、エジプトはキリスト教国であった。それゆえ、現在でも、イスラム教徒であるアラブ人に対して、コプト教を信仰している人びとは、自分たちこそが古代からのエジプト人であるという自負をもっているかのように感じられるという¹³。

3 エジプトでの最初の伝道者

エジプトでキリスト教を最初に布教したのは誰かという問題のまえに、イエス・キリストとエジプトとの関係を最初に取り上げるべきだろう。いわゆる〈聖家族のエジプト逃亡伝承〉のことで、東方からやってきた「占星術の学者たち」（東方の3博士）が「幼子イエス」を拝み、贈り物を捧げて、帰国したのちのエピソードである。『新約聖書』の「マタイによる福音書」第2章の記述は、以下のようになっている。

占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフ〔イエスの父親〕に現れて言った。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデ〔ユダヤの王〕がこの子を探し出して殺そうとしている。」ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、ヘロデが死ぬまでそこにいた¹⁴。

11 中東教会協議会（編）、村山盛忠、小田原緑（訳）、中東キリスト教の歴史、日本基督教団出版局、1993年、19-20頁参照。ちなみに、コンスタンティノポリス（現イスタンブール）は、「コンスタンティヌスの都」という意で、かれがローマ・ビザンティン帝国の新首都として建設したものであって、ここに置かれた主教座はローマに次ぐ地位にあった。永田雄三、イスタンブール、世界大百科事典、第2巻、平凡社、2007年、282-286頁参照。

12 中東教会協議会（編）、1993年、13-16頁参照。

13 村山盛忠、1974年、97-98頁参照。

14 「マタイによる福音書」、聖書 新共同訳、日本聖書教会、2001年、（新）2頁。

すなわち、妻マリアとイエスを連れたヨセフはエルサレムを脱出、エジプトへ旅立ち、ヘロデ王の死までエジプトに滞在していたというのである。このイエス一家のエジプト逃亡物語の根拠は、聖書にこの数行しか記載されていないが、コプト教徒たちは、この伝説を事実として受容してきた¹⁵。現在でも、たとえばワディ・ナトゥルン一帯は、このエジプト逃避行の聖地として古くから信仰されてきたが、なかでもニトリア山はその中心とされている¹⁶。

いずれにせよ、〈聖家族のエジプト逃亡伝承〉は、コプト教徒たちにとって、みずからの土地とキリスト教信仰を結びつける特別な意義を有する伝説であるといえよう。

これと同様のことが、最初にエジプトでイエスの教えを伝道した人物にもあてはまる。すなわち、『新約聖書』の「マルコによる福音書」の著者とされるマルコである (Fig. 1)。使徒ペテロが捕らわれたのち、天使の助けで逃れて、最初に訪れたのが、マルコの母の家であったほか、パウロとバルナバの布教に助手として同行したりと¹⁷、使徒たちの警戒に接していた聖人であったとされる¹⁸。

ヤコブス・デ・ウォラギネ (1230?-1298) による『黄金伝説』は、中世でもっとも読まれた聖人や殉教者の列伝集であるが、これに、「[...]、マルコは、聖ペテロによってエジプトのアレクサンドリアに派遣され、この地に初めて主のみ言葉を伝えた」と記述されており、その地の司教に任じられたとあるのだ¹⁹。

この伝承はしかし、ヨーロッパでは一般的に承認されてはいない。たとえば、ドナルド・アットウォーターとキャサリン・レイチェル・ジョンの『聖人事典』(1998年)によると、「彼 [マルコ] が後にアレクサンドリアに行って、そこで福音を説教したということは、ありそうなことではあるが、その教会の初代の主教でトラヤヌス帝の統治の時期に殉教したという伝承は、信頼すべき根拠を欠いている」²⁰といわれるからである。くわえて、本稿で参照した『黄金伝説』の訳注にも、マルコが自身のかわりにアニアノスを司教に任じたという記述については、「エウセビオスが『教会史』にかかげているアレク



Fig. 1 聖マルコのイメージ。『ロルシュ聖福音集』、9世紀、ヴァチカン美術館、ヴァチカン。

15 Vgl. Alberto Siliotti: *Coptic Egypt. Egypt Pocket Guide*. Cairo: The American University in Cairo Press, 2008, S. 8.

16 山形孝夫、砂漠の修道院、平凡社、2006年、38-40頁参照。

17 「使徒言行録」、聖書 新共同訳、日本聖書教会、2001年、(新) 236-238、244頁参照。

18 船越一幸、守護聖人の世界 ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』を読む、文芸社、2010年、21-22頁参照。

19 ヤコブス・デ・ウォラギネ (前田敬作、山口裕訳)、福音史家聖マルコ、黄金伝説2、平凡社、2006年、100-101頁参照。

20 ドナルド・アットウォーター、キャサリン・レイチェル・ジョン (山岡健訳)、マルコ、聖人事典、1998年、395-396頁。

サンドリア司教一覧表には、アニアノスが筆頭にあげられ、マルコの名前は書いてない（マルコのアレクサンドリア伝道の史実性には、かなりの疑問があるとされている）」²¹ という。

ところが、コプト教会では、マルコの殉教とそのエジプト出自は史実として承認しているのである。たとえば、1965年7月24日付けの聖マルコ大聖堂定礎式辞では、「この大聖堂はキリストの御弟子である聖マルコに捧げられるものであります。彼は北アフリカに生まれた生粋のアフリカ人でありました。[・・・]。そしてついにアフリカの地であるアレクサンドリアにおいて、紀元六八年、ローマ人の手によって殉教したのであります」²² と、当時のコプト正統教会主教キュリロス6世が述べている。

くわえて、マルコに関しては、アレクサンドリアにあったその聖遺体をめぐるエピソードも伝わっている。「主の紀元四六七年、[・・・]。ヴェネツィアの市民たちは、マルコの聖遺体をアレクサンドリアからヴェネツィアに移し、聖人を記念して壮麗な教会を建てた」²³ と、『黄金伝説』に記載されている (Fig. 2)。

ここで興味深いのは、ヴェネツィア市は現在もなお、聖マルコを市の守護聖人に仰ぎ、そのシンボルである獅子を市章にしており、さらに、町のシンボル建築として名高いサン・マルコ大聖堂がマルコの墓のうえに建てられているということである²⁴。

すなわち、アレクサンドリアでのマルコのキリスト教布教と殉教がヨーロッパの教会史では史実として疑問視されているとしても、アレクサンドリアにマルコの聖遺体が安置されていたことと、そこでの聖遺体略奪とヴェネツィアへの移送は、その実行者たちの町では、すでに既成事実として、町の歴史と一体となっているのだ。

この矛盾につじつまを合わせるとするならば、聖マルコがアレクサンドリアで伝道および殉教しなかったとしても、その後、いつの時代からかは判明しないが、かれの聖遺体があの中地中海沿岸の港湾都市に存在したという可能性がまったく考えられないわけではない。また、この事件にまつわる伝承が聖遺体をヴェネツィアまで船で移送したとしている地理的条件も、蓋然性は認められる。



Fig. 2 ティントレット、《聖マルコの遺骸を盗み出すヴェネツィアの商人たち（マルコの聖遺体の発見）》、1562-66年ごろ、ブレラ美術館、ミラノ。画面左側に書物を携えて立っている巨大な聖マルコの亡霊と、そのまえに横たわっているのが聖マルコの聖遺体で、色が白いののは聖人の遺体は腐らないことを表現している。

21 ウォラギネ、福音史家聖マルコ、2006年、114頁参照。

22 村山盛忠、1974年、97-98頁参照。

23 ウォラギネ、福音史家聖マルコ、2006年、104頁参照。

24 マルコム・デイ（神保のぞみ訳）、福音書記者マルコ、図説キリスト教聖人文化事典、2006年、原書房、69頁、日高健一郎、サン・マルコ大聖堂、世界大百科事典、第11巻、平凡社、2007年、566頁、船越一幸、2010年、24-25頁参照。ちなみに、ヴェネツィア市民（商人とされる）によるマルコの聖遺体略奪行為は一般に、828年のこととされている。

ともあれ、この伝説の真偽を究明するのが本稿の主旨ではないため、これ以上は言及しない。しかしながら、ヴェネツィア市民のこの略奪行為に関して、ウォラギネがまったく批判もせず、マルコの聖遺体移送をマルコ本人が幫助するような伝説を記載しているところに、ヨーロッパ中世におけるエジプトやアラブ人に対する視線がうかがい知れるようで、興味深いといえるだろうか。

4 聖アントニウスと聖パウルス

ヨーロッパの教会からすれば、キリスト単性論を奉じる中東のキリスト教会が異端とされてきたことは、前述のとおりである。だが、これにもかかわらず、修道会の歴史がエジプトの砂漠にいた修道士から始まったという事実は承認しており、エジプトを修道制のモデル地域とみなしている²⁵。

アントニウス（大アントニウス）はとりわけ、修道士の共同体を組織したゆえに、「キリスト教修道制の父」と呼ばれて、西欧でも評価が非常に高い聖人である²⁶ (Fig. 3)。その名を冠したアントニウス修道院は、現在もエジプトのベニウスにあるが、エジプト最古の修道院とされている。

聖アントニウスの事績は、つぎのようなものである。「修道院制度の伝説的創始者として、ベニ・スエフ周辺の村出身のアントニウスは是認されている。251年に生まれたかれは若かりしころ、ある年配の男性がすでにひとりで暮らしている、その村のほぼ隔絶したはずれで生活することを決めた。それからしばらくのちに、アントニウスは東部の砂漠に隠遁したのだが、この地でかれの敬虔さについての名声が高まり、ついには数名の信奉者がその周辺に集まることとなった。さらに、アントニウスはもっと砂漠の奥地へと隠棲し、356年に紅海に近い地で死去した」²⁷。つまり、かれの隠遁生活そのものが、キリスト教全体の修道院制度の起源となっているのである。

中世ヨーロッパにおいても、アントニウスはきわめて信仰の厚い聖人であった。その図像の特徴は、悪魔を退散させるのに用いたという鈴や、アントニウス十字またはエジプト十字とよばれる T 字型の杖をもっていたり、その足もとには火炎、悪魔、当時「アントニウスの火」と呼ばれた^{ぼっかく} 麦角菌中毒症状の人びとが描かれた。アトリビュートである火炎は、この呼称に由来し、11世紀末に設立されたアントニウス修道会は、この患者の看護が目的であった。また、かれの図像の足もとにブタも描きこまれて

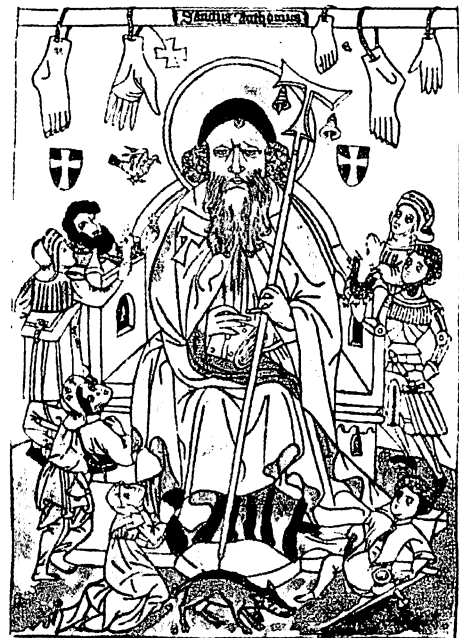


Fig. 3 聖アントニウスのイメージ。木版画、1450年ごろ、国立素描版画館、ミュンヘン。

25 カール・ズゾ・フランク（戸田聡訳）、修道院の歴史 砂漠の隠者からテゼ共同体まで、教文館、2002年、5、34頁参照。

26 オットー・ヴィマー（藤代幸一訳）、アントニウス（大）、図説 聖人事典、八坂書房、2011年、24-25頁、アットウォーター、ジョン、アントニウス、1998年、55-57頁参照。

27 Gawdat Gabra, Anthony Alcock (m. Beitr.): *Kairo. Das koptische Museum und die frühen Kirchen*. Übers. v. Cäcilia Fluck, Kairo: Egyptian International Publishing Company-Longman, 2010, S. 31.

いることもあるが、これはアントニウス修道会士は、その看護の見返りとしてブタの放し飼いが許されていたという事実が関連しているという²⁸。

『黄金伝説』によると、隠棲中のアントニウスが悪魔や悪霊の誘惑を信仰の力で払いのけるというエピソードがいくつか記されている。「あるとき、彼は、肉の欲望で誘惑する悪魔を信仰の力でうち負かしたことがあった。すると、悪魔は、黒い肌の子供の姿をしてあらわれ、彼のまえに平伏して、〈負けました〉と兜をぬいだ。というのは、聖アントニウスは、若者たちをわなにかける淫欲の悪魔をおしめしくださるようにとかねてから神に祈っていたからである。彼は、黒い子供の姿をした悪魔を見て、こう言った。〈きさまのそのいやらしい姿を見たからには、もうきさまを怖れたりはいしないぞ〉」²⁹。

この悪魔の誘惑にうち勝つ聖人アントニウスは、ヨーロッパの宗教画の人気モチーフとなった (Fig. 4)。そして、かれを描く有名な絵画モチーフのもうひとつは、最初の修道士とされる聖パウロス (テーベのパウロスとも) との出会いである。

アントニウスが修道制の父とされる一方で、パウロスは初代修道士、正確に言えば、初代穩修士といわれる。穩修士とは、共住修士に対する独住修士のことで、かれはエジプトのテーベの富裕な家に生まれたが、デキウス帝 (在位 249-251) の迫害から、テバイトの砂漠へ逃れて、迫害後も生涯とどまった。90歳のアントニウスの来訪を受けたのは、パウロスが113歳のときで、アントニウスのほかには、だれにも会わず、60年以上の禁欲と観想の生活を送ったという³⁰。



Fig. 4 ミケランジェロ《アントニウスの誘惑》、1487-88年、キンベル美術館、テキサス。異形の悪魔たちがアントニウスを誘惑しているところ。この絵画の構図そのものは、マルティン・ショーンガウアーの版画を模写したもの。

28 マルコム・デイ、アントニウス (大)、2006年、原書房、24-25頁参照。

アントニウスのアトリビュートについては、文献によっていくらか異同があるので、少し解説しておく。麦角菌とは、イネ科植物の穂の部分に寄生して生成される菌核のことで、有毒であるため、嘔吐、痙攣などの食中毒の症状を発生させるのだが、これが「アントニウスの火」と呼ばれていた。この名称の由来は一説によると、1050年に聖アントニウスの遺骨がコンスタンティノポリスからフランスに移されたが、その効果によって、当時、「聖なる火」と呼ばれた丹毒に罹っていた貴族が治癒したという逸話から、丹毒が「アントニウスの火」と呼称されるようになったという。また、ブタについても、この動物の脂がその病に効くとされていたために、アトリビュートになったともされる。寺中理明、麦角、世界大百科事典、第22巻、平凡社、2007年、592頁、荒木成子、アントニウス、世界大百科事典、第2巻、平凡社、2007年、71頁参照。

29 ヤコブス・デ・ウォラギネ (前田敬作、山口裕訳)、聖アントニウス、黄金伝説1、平凡社、2006年、267頁。

30 ヤコブス・デ・ウォラギネ (前田敬作、山口裕訳)、初代穩修士聖パウロス、黄金伝説1、平凡社、2006年、239-242頁参照。



Fig. 5 聖アントニウスによるテーベの聖パウロス訪問のイコン、1777年、メルクリウス（アブ・サイファイン）修道院、オールド・カイロ。Gawdat Gabra, Marianne Eaton-Krauss: *The Illustrated Guide to the Coptic Museum and Churches of Old Cairo*. Cairo, New York: The American University in Cairo Press, 2007, S. 196. エジプト十字の杖をもっているアントニウス（左）とパウロス（右）のあいだには、パンをくわえているカラスと、足もとには2頭のライオンが描かれている。カラスとライオンはパウロスのアトリビュートである。

聖パウロスのシンボルは、カラス、^{しゆる}棕櫚（の服）、2頭のライオンであるが、それは聖アントニウスと関係する伝説と符合する。すなわち、『黄金伝説』に記述されているところでは、アントニウスが夢のなかで啓示を受けて、パウロスを砂漠へ探しにいくと、「棕櫚の実」を運んでいるサテュロスに遭遇したり、ようやく邂逅したふたりの食事に、「カラス」がいつもの2倍の大きさのパンを持ってきたり、天使の啓示によって帰路を引き返したアントニウスがパウロスの遺体を発見し、その埋葬を「2頭のライオン」が手伝ったなどのエピソードである³¹ (Fig. 5)。

このふたりの聖人が100歳以上の長寿を全うしているのはもちろん、にわかに信じがたいが、もはや伝説となっている以上、いたしかたのないところといえよう。しかしながら、本稿にとって重要なのは、かれらがヨーロッパにおいても広範に認知されて好まれる聖人であり、その修道士としての生涯が後世の修道士や修道院の規範となっていたことだ。さらには、現代のコプト教においても、それが生きつづけているという点で、コプトの修道士からすれば、ヨーロッパの修道院制度とは異なるという認識があるという事実なのである。

5 砂漠のなかの修道院

エジプト全体のコプト教会信者数は、エジプト総人口の約1割にあたる約300万人であって、カイロ市内には現在、100以上のコプト教会や施設があるが、これとはべつに、ナイル西岸の潤れ谷から上エジプトの乾燥地帯に、紀元4世紀から5世紀に起源をもつ由緒正しい修道院が11箇所、散在している。修道士たちはコプト語の聖書を用いており、100や200の詩篇をコプト語でそらんじることができるといわれる³²。

幼子イエスのエジプト逃避行の聖地となっているワディ・ナトゥルンにも、4つのコプト僧院がある

31 同上参照。

32 山形孝夫、2006年、24-25頁参照。

が、そこでもまた教会とおなじく、徹底されてきた宗教的伝統を遵守している。2000年間をつうじて、諸外国の支配に何度もさらされてきたにもかかわらず、現代にいたるまで継承してきたコプト教の慣習と修道生活が、最古のキリスト教の形態を残しているということである³³。

たとえば、ワディ・ナトゥルンにあるコプト修道院のひとつ、聖マカリウス修道院は、その名をとられた聖人に由来している。4世紀の人マカリウスは、キリスト教司祭の子として生まれ育ったが、天使の啓示を受けて、家財を貧者に託し、この谷に移り住んだとされる。最終的には、ニトリア山に岩穴を掘って、その奥の闇のなかで瞑想に励んだとされる。かれも、聖アントニウスとおなじく、悪魔の誘惑にあらがった苦行者であった³⁴ (Fig. 6)。

記録では、紀元315年、最初の僧院が上エジプトのテーベにつくられて、数百名の修道士が戒律に従い、修道生活を始めたという³⁵。現在もまた、修道士たちの1日は、ティ・アクビ（7つの祈り）という1日7回の祈祷と、その間の労働で時間区分されており、そのさい、ティ・アクビで朗読される詩篇も厳密に決められている。そして、かつての修道士たちも、アントニウスやパウロスと同様に、砂漠の夜に姿をみせる悪魔やその誘惑とたたかった伝説がいくつも伝わっている。現在の修道士たちもまた、修道生活を謹直に送っており、その様子は、現地の施設を訪問した村山盛忠氏や山形孝夫氏の著作に詳しい。本学ICPが調査、保存修復を進めているサッカラにも、5世紀ごろに創立されたアブ・イエレミア修道院があったが、9世紀中葉から廃墟となった³⁶。

修道院志願者の動機は、「信仰体験による者、罪意識からの解放を願う者、聖書の教訓を実践するために、修道士の感化によって、また教会の世俗化に抵抗してなど」³⁷と、さまざまである。イメージ的には、日本の「出家」といった意味合いに類似している感があるようだ。

いまだ、人間の集落から離れた砂漠で孤独に修道生活をいとなむコプト教徒であるが、その本質は、西欧の修道院の発想とは根本的に異なっているように思われる。ドイツのコプト学者オットー・フリードリヒ・アウグスト・マイナルドゥスのことばであるが、「エジプト人は砂漠に対して、西欧人とは異なった理解をしている。西欧人にとって砂漠は死せる場所であり、今や人間を殺戮し破壊する核実験場と化

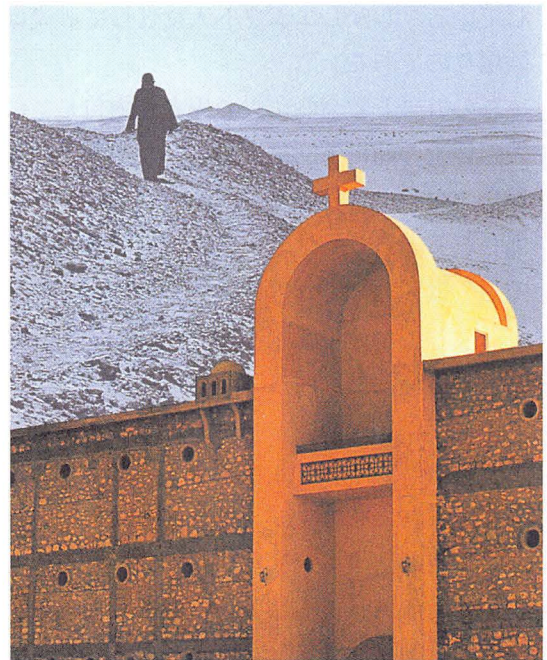


Fig. 6 砂漠の道进行修道士とワディ・ナトゥルンの聖マカリウス修道院。山形孝夫、砂漠の修道院、平凡社、2006年、表紙カバー。

33 村山盛忠、1974年、75、117頁参照。

34 山形孝夫、2006年、40-44頁参照。

35 前掲書、39頁参照。

36 三宅理一（文）、平剛（写真）、砂漠の楽園 コプトの僧院、TOTO出版、1996年、209頁参照。

37 村山盛忠、1974年、125頁。

している。しかしエジプト人にとって砂漠は、依然として神の祝福を受ける場所であり、人間の魂の実験場なのである」³⁸。

このコプト教会側に立つ思考が内包しているのは、聖アントニウスや聖パウルスなどの古代キリスト教隠修士の遁世生活による信仰が中東の砂漠から始まったことを確認しつつ、そうした信仰のありかたから、ローマ・カトリック教会やギリシア正教会が乖離してしまっているのではないかという批判だと思われる。とりわけ、現在のコプト教会をかつて異端とみなしたローマ・カトリックのありかたについても、批判的なニュアンスをこめているのではないだろうか。

6 コプト教会以前と以後

聖書の時代から、厳格な戒律を遵守しつつ、宗教的伝統を堅持してきたコプト教であるが、現代のエジプトにおいてはマイノリティの立場でありながらも、なお力強く存在している。だが、古代エジプトでキリスト教がマジョリティであった時代も、かつてなかったわけではない。

紀元前のエジプトは多神教であって、ファルス信仰で知られる男性の農耕神オシリスとその妻である豊穡の女神イシスなどを筆頭に、たくさんの神々が信仰されていた。こうした古代エジプト人の精神生活に変化がもたらされる原因のひとつになったのは、ローマ帝国との政治的関係が発生してからのことである。つまり、紀元前30年に、エジプトはローマ帝国の属領となり、ローマの総督の管理下に置かれることになった³⁹。それゆえ、ローマ帝国の宗教的態度が、エジプトにも多大な影響をもたらすのである。

このような時代に、キリスト教は新興宗教として登場するのだった。エジプトでの最初の伝道者の聖マルコが、アレクサンドリアですでにイエスの教えを信奉していた人びとのまえで福音を伝えたのは、紀元60年ごろとされる⁴⁰。このことが、西欧においては伝説の域を出ないにもかかわらず、コプト教会では史実として受容されているのは、既述のとおりである。しかしながら、ほかのローマ帝国領内とおなじく、新興宗教としてのキリスト教徒たちが苛烈な弾圧や迫害にあっていたことは、いくたの聖人殉教伝説で語られるように、想像に難くない。

たとえば、202年、セヴェルス帝がエジプト内の特定の都市に「市参事会」を任命し、キリスト教信仰禁止の法令を公布した結果、無慈悲な迫害がおこなわれた。なかでも、249年から260年までのデキウス帝とヴァレリアヌス帝によるキリスト教徒への迫害はすさまじかった⁴¹。

313年に、コンスタンティヌス帝が発布したミラノ勅令によって、マイノリティとして迫害を受けていたキリスト教徒たちに、大きな転機がおとずれる。この勅令こそは、キリスト教徒の信教の自由を公認するものであった。そして、ついに392年には、キリスト教はローマの国教となったのである⁴²。

この時期すでに、キリスト教徒はローマ帝国内で増大の一途をたどっていく一方で、国教化以降、ほ

38 前掲書、118頁。

39 Vgl. Gabra, Alcock, 2010, S. 11.

40 Vgl. Ebd.

41 Vgl. Ebd.

42 Vgl. A. a. O., S. 11f.

かの宗教は異教として衰退していく運命にあった。その結果、キリスト教は、イエスの解釈をめぐって内部抗争をくりかえしながらも、マイノリティであった受難時代の復讐を果たすかのように、マジョリティとしての強大さを発揮するのだ。たとえば、エジプトのアレクサンドリアでは、イエスの教えを信奉する者たちが、古来からのエジプトの神々の信仰者やユダヤ教徒と積極的に闘争していくのである。

とりわけ、象徴的なのは、391年と415年に発生したふたつの騒擾であって、そのひとつは、4世紀末のアレクサンドリアのセラペウム破壊である。セラペウムとは、エジプトの神オソラピス（オシリスとアピスの結合神）とゼウス、ヘリオス、ハデス、アスクレピオス、ディオニュソスなどのヘレニズム世界の神々の属性が融合された混合神セラピス⁴³を崇拝する、いわゆる神殿施設である（Fig. 7）。アレクサンドリアは、この時期、セラピス神信仰の中心地であった。

しかし、391年6月にテオドシウス帝が異教禁止令を發布すると、エジプトの神々を信仰していたアレクサンドリアの人びとは、神官たちとともに、セラペウムにバリエードを構築してたてこもったのである。一方、暴徒と化したキリスト教徒たちを率いたのは、アレクサンドリアの総主教テオフィロスである。激しい市街戦がくりひろげられたが、最終的に

は、皇帝がエジプト領事とエジプト駐屯軍司令官を派遣した結果、キリスト教徒から「異教徒」とされる人びとはセラペウムから退去させられた。シンボルのセラピス神像は通りに引きずりだされて、斧で叩き割られた。セラペウム内にあったという、ヘレニズム文化最高の知が集積されていたことで名高いアレクサンドリア図書館の分館は、このときに破壊されたとされる⁴⁴。

もうひとつは、キリスト教徒による新プラトン主義の女性哲学者ヒュパティアの殺害である。このときのアレクサンドリアの主教は、当地生まれのキュリロスで、前主教テオフィロスの甥であった。他分派の教会を閉鎖したり、ユダヤ人を追放し、ユダヤ教会堂シナゴグをキリスト教会へと改めたり、ローマの総督オレステスとも争い、かれと対立する修道士を扇動した人物である⁴⁵。

アレクサンドリア生まれのヒュパティアは、天文学者で数学者のテオンを父にもつ哲学者で、数学と天文学の分野ですぐれた著作を残している。哲学者としての名声は当時から高く、生まれ故郷の町でプ



Fig. 7 セラピス神の胸像。アレクサンドリア美術館、アレクサンドリア。マンフレート・ルルカー（山下主一郎訳）、エジプト神話シンボル事典、大修館書店、1996年、127頁。

43 イアン・ショー、ポール・ニコルソン（内田杉彦訳）、セラピス、大英博物館 古代エジプト百科事典、原書房、1997年、282頁参照。

44 ジャスティン・ポラート、ハワード・リード（藤井留美訳）、アレクサンドリアの興亡 現代社会の知と科学技術はここから始まった、主婦の友社、2009年、422-425頁参照。

45 Vgl. Gabra, Alcock, 2010, S. 12. アットウォーター、ジョン、キュリロス〔アレクサンドリアの〕、1998年、146-147頁参照。ちなみに、キュリロスは神学論争の著作が多く、神学者としての評価は高いとされる。

ラトン主義哲学の講義をおこなっていたほどであった⁴⁶。

しかし、彼女が黒魔術使いであるという嘘をキュリロスが流した結果、キリスト教徒たちに馬車からひきずりだされて、路上で裸にされたヒュパティアは、教会内で生きてまま肉をそがれて殺害され、手足をばらばらにされたのだった⁴⁷。

彼女の殺害の原因については、アレクサンドリアでの強い影響力やローマ総督オレステスとの親しい関係など諸説あるが⁴⁸、どれも推測の域を出ないものの、キュリロスに非があるとするものが一般的である。日本基督教団出版局発行の『キリスト教人名事典』記載のキュリオスの事績に関する記述においても、「[...]、その好戦的性格と激しい政治的行動のゆえに敵も多く、特に偉大なプラトン主義哲学者ヒュパティアの殺害については、直接に手を下さなかったにしろ、その責任はまぬがれない」⁴⁹とされる。

いずれにせよ、ローマ帝国内でキリスト教が勢威を誇っていた時代に、ヒュパティアがキリスト教徒でなかったことは確かであって、そのこともキュリロス殺害説の根拠のひとつであるといえよう。

ちなみに、アレクサンドリア主教テオフィロスはコプト教会やシリアの教会では聖人とみなされ⁵⁰、おなじくその甥のキュリロスもまた、教会博士として記憶され、聖人にも列している。この事実から、かれらに対するキリスト教会からの評価をみることができるだろう。現在のルクソールにある新王国時代の遺跡カルナック神殿内に、古代エジプトの神像を砕いて、そこに刻印された十字架があるが (Fig. 8)、この遺跡はまさしく、古代から存在したエジプトの神々をキリスト教が異教として破壊し、拡大していった歴史を示しているのである。

こうした歴史過程のなかで、アレクサンドリアを中心とするエジプトの教会は、教義においてキリスト単性論を支持したために、ローマやコンスタンティノポリスに対しても分派の一途をたどっていったわけだが、またもや時代史の転変をむかえることになる。すなわち、619年のペルシア人による

ローマ帝国侵入と占領、さらに641年から868年のアラブ民族によるエジプト征服である。エジプトは、

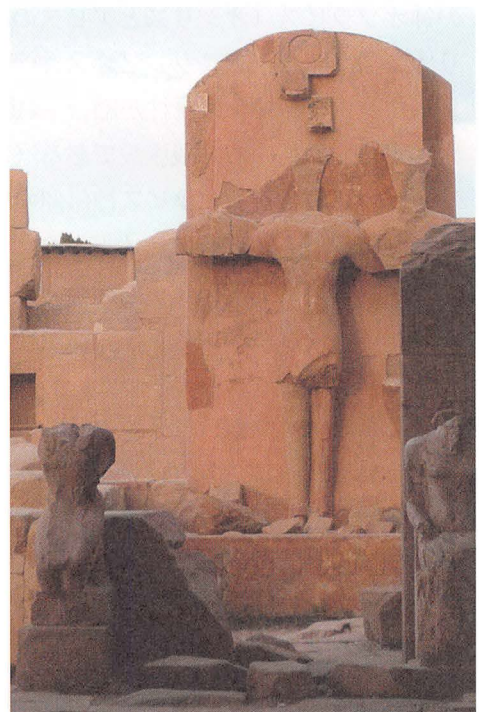


Fig. 8 カルナック神殿内の十字架

46 Vgl. Karl Praechter: Hypatia. In: Wilhelm Kroll (Hrsg.): *Paulys Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*. Stuttgart: Alfred Druckenmüller, 1914, Halbbd. 17, S. 242-249, hier S. 245f.

47 ポラート、リード、2009年、445-446頁参照。

48 Vgl. Praechter, 1914, S. 247f.

49 『キリスト教人名事典』編集委員会 (編)、キュリロス (アレクサンドリアの)、キリスト教人名事典、日本基督教団出版局、1986年、432頁。

50 『キリスト教人名事典』編集委員会 (編)、テオフィロス (アレクサンドリアの)、キリスト教人名事典、日本基督教団出版局、1986年、927頁、およびポラート、リード、2009年、447頁参照。

アラブ・イスラム帝国ウマイヤ朝の属州となって、アラブ人が定住するようになったのだ⁵¹。

キリスト教徒であったエジプト人のイスラム教改宗は、7世紀にかなり迅速におこなわれたようである⁵²。これ以降、エジプトにおいて、キリスト教徒がまたもやマイノリティへと立場が変化し、かれらはみづからを「コプト」と呼ぶようになっていくのである。

7 マイノリティとして

スペインの映画監督アレハンドロ・アメナーバルの『アレクサンドリア』(2009年、日本公開2011年)は、女性哲学者ヒュパティアを主人公にして、391年のアレクサンドリアのセラペウム破壊と415年の彼女の殺害を描いた歴史映画である。とりわけ、実物大セットとCGを駆使して、ヘレニズム文化の中心都市アレクサンドリアを再現した映像は圧巻であったが、この題材を選択したアメナーバル監督の意図は、インタビューからも明白である。

4世紀のアレクサンドリアについて詳しく調べた僕たちは、実在した天文学者ヒュパティアの物語を伝えることにしたんだ。なぜなら、彼女が生きた時代と僕たちが生きている現代に、数多くのつながりが見つかったからだ。アレクサンドリアは文明の象徴だったが、それが徐々に破壊された原因はさまざまな派閥の争いだった。特に、宗教的な派閥だ⁵³。

すなわち、1600年前の世界と現代は類似する部分が多く、しかも、その原因は宗教の派閥抗争にあると、かれは考えている。また、現在の世界もおなじく、宗派間の抗争が現代の文明を破壊していることを明言している。そして、そこに映画『アレクサンドリア』の意義があるのを明確に認識しているのである。さらに補足すれば、西欧の映画監督アメナーバルが、そのテーマの重大さをはっきりと問題視したうえで映像化したこと自体が、確固たる意義と強固なメッセージ性を有しているといえよう。

ここで、本稿冒頭での新聞記事に回帰すると、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という3大一神教の紛争そのものがいずれにせよ、それらの歴史への無知もあいまって、日本人にとっては、理解や共感が非常に困難な問題である。それにもかかわらず、エジプトの宗教的現状に関して、われわれに可能なことがあるとすれば、コプト教をめぐる歴史およびコプトとイスラムの立場を十二分に知悉し、エジプトにおける双方の相互理解と共生を望むのみであると思われる。

キリスト教会のなかでも非常に古い歴史を有するコプト教は、キリスト教の1派でありながら、西欧からみれば、すでに古代から異端とされてきた。そして現在も、コプト教徒数はエジプト総人口の約1割ほどのマイノリティである。

とはいえ、なるほど本稿の目的がコプト教批判を意図するのではないものの、かつてキリスト教がローマ帝国の国教と化し、エジプトがその属州だった時代のアレクサンドリアでは、ユダヤ教徒やエジプト古来の神々の信者たちを激しく攻撃し、その文明や文化を破壊したという事実は、このうえなくアイロ

51 Vgl. Gabra, Alcock, 2010, S. 13.

52 山形孝夫、2006年、239-240頁参照。

53 本島聖子(編)、『アレクサンドリア』パンフレット、松竹株式会社、2011年、24頁。

ニカルであるが、決して忘れてはならないだろう。

最後に、2011年夏にオールド・カイロのコプト教会を訪問したときのことを記しておこう。オールド・カイロはローマ帝国によって建設された城塞都市で、いまも最古のキリスト教会が立ちならぶ地域である。それらのコプト教会のひとつを見学していると、数名の信者の方たちが入ってきた。穏やかな沈黙にいだかれながら、みな様に真剣な面もちで、なにかの作法に則して、聖人の聖画像に丁寧な祈りを捧げている。その真摯かつ自然なすがたがきわめて印象的で、大きな感銘を受けたことはいまなお、筆者の記憶の奥底に深く刻まれている。

本研究は、「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成20年度～平成24年度）」によって行われた。